



# 目次

## 第三版への前置きとして

一九五一年版への緒言

## 第一版への緒言

## 第一章 新しい基調

各時代はその時代の問題によって特色づけられる——「創造的観念」、それらの盛衰——ギリシヤ哲学からの実例——キリスト教的哲学の興隆と衰滅——近代哲学の興隆と衰滅——哲学への関心が技術への関心によって窒息する——ひとり数学だけが「抽象的」でありながら、しかもその地位を失わない——数学はシンボルと意味の科学である——科学における感覚与件と解釈——シンボルとしての与件とその意味としての法則——シンボルの力は新しいテーマである——「動的」心理学——記号論理学——若々しい「創造的観念」の異常な活動力——観念の「場」の限界——「新基調」の約束するもの

## 第二章 シンボルへの転換

二九

発達心理学に及ぼす意味の諸問題の影響——発生理論の前提、動物と人間の欲求が同一であること、シンボルに対する反応がサインに対する反応から派生すること——送信器としての精神——誤謬の源泉——誤謬は複雑化とともに増加する——シンボル使用の非実践的な効果——知能を愚かさに戻元する諸学説の不合理性——このような理論は非実践的な祭式の根強さによって否定される——また芸術が真剣に追求されることによって否定される——夢の現象によっても否定される——人間の欲求の明細目録を再吟味する——特殊な機能は特殊な欲求を前提する——シンボル化の欲求——変圧器としての人間精神——非実践的行動はシンボル体系的である——この見解は多くの人類学上の難問題を解明する——シンボルのそれぞれの用法はそれぞれ別個な研究を必要とする

### 第三章 サインとシンボルの論理……………三

意味—関係に関する現存の諸分析はおおむね容認できる——歴史的概観——意味の「性質」は捕捉しにくい——意味は項の機能である——脈絡としてのパターン——主観、シンボルおよび対象——あるパターンのなかの項の選択と相対的な「意味」の意味——サインとシンボル——サイン—関係の領域は広範囲にわたる——間違い——サインの論理的単純性——シンボルと表象——名前——サインとしての、また、シンボルとしての——両者の区別をヘレン・ケラーの事例によって例証する——サイン作用、表示作用および含蓄作用——表示

作用と含蓄作用との関連性——固有名詞は例外——シンボルと説話——逐義的意味と命題——構文論的構造——シンボルとしての「論理的絵画」——前進的抽象化——表象と概念——抽象化は合理性の基礎——言語の論理的な力——真と偽

第四章 論弁的形式と現示的形式

「論理的投影」——論弁的形式は一つの「投影」であること——カルナップの結論、言語の構文論が表象可能性の限界である——非逐語的シンボル体系は「感情的」——形而上学に対するラッセルおよびヴィトゲンシュタインの見解——哲学は意味の展開である——言語よりも広範囲にわたるシンボルの機能——言語だけに局限することは心性のあまりにも多くの部分を無意味なままに放任することとなる——合理性は分節化から始まる——感覚・経験も一つの分節化である——「事物」の概念的な性格——シンボル使用の先駆としての「形態」——非論弁的形式の把握——この種形式は派生的な意味においてさえ「言語的」ではない——言語の論理的特性——現示的シンボル体系の論理的特性——初歩的な理解力——感情の諸形式——現示的形式の前進的分節化——文化の主要な発達に対する基調

第五章 言語

..... 一三六

すべての人間は完全に有節的言語をもつ——どんな動物も言語をもたない——動物のなす伝達——類人猿のおし——類人猿の子供に見られる、物を言う本能の欠如——言語の起源のなぞ——それは時々「話そうとする本能」に求められる——雙の子供と「野生」の子供は物を言わぬ——言語学者によって拒否された問題——サビアの推論、それはシンボルの一般理論を必要とする——その起源は常に伝達に求めるべきである——それはまた初期のシンボル機能に求めるべきである——「まわらぬ舌で不完全にでも発音しようとする本能」の欠如は言葉を妨げる——シンボルと自由な形式——類人猿の初歩的なシンボルの行動——功利主義的見解は間違い——ファーネスの類人猿——アヴェイロンの「野生児」——人間に見られる「まわらぬ舌で不完全にでも発音しようとする」本能は一時的な本能である——言語学習の諸条件——ドノヴァンの起源説——含蓄作用はおそらく表示作用に先行する——その用法——それは常に命題的である——発達に対するビューラーとヴェーゲナーの見解——修正——一般性は隠喩を通じて生ずる——「色褪せた隠喩」についてのヴェーゲナーの見解——概念的思考の進化——言語の普遍性の説明

## 第六章 生命のシンボル、聖礼典の起源

感覚イメージと概念——隠喩的用法——初源的抽象化——ファンタジ——欲望と夢——初源的な想像——夢のなかでのシンボルと意味との混同——未開

人の思考の場合——「聖物」の力——観想における知性的興奮——情感的表現と身振り——祭式——物まねに基づく儀式——遊戯における模倣——デューイの理論を拒否する——神聖な概念を認めたものとしての祭式——魔術は本質的に実践的ではない——ありふれた諸行為も最も厳格な形式を獲得する——聖礼典——神々は「聖物」から派生する——動物の姿——トテム崇拜——神々の成立についてのジェーン・ハリソンの見解

## 第七章 生命のシンボル、神話の根源

.....二三

祭式と神話とは起源を異にする——夢と物語——初源的な物語——登場人物と所作とはシンボリックである——おとぎ話の発達——おとぎ話と神話——機能の相違——おとぎ話にある現実主義的な要素——形式の一般化——「自然神話」の問題——「文化英雄」——おとぎ話と神話とをつなぐもの——彼の物語における自然のシンボル——月の神の進化——月の人格化は「女性」の月化である  
神話の仕上げ——詩の定式化の影響——過渡的形式としての『カレワラ』——叙事詩の段階は神話の完成期である

## 第八章 音楽に内在する意義について

.....二五三

芸術作品と加工品——「有意味的形態」——現代美学の中心課題としての意味——芸術的意義の問題——精神分析の理論は助けにならない——形式が芸術的

意義の源泉である——音楽が最もよい実例である——音楽を娯楽と考ふる諸理論——情感を刺激するものとして——情感を伝達するものとして——自己表現説の誤謬——音楽は兆候ではなくシンボルである——その「意義」は芸術の論理的問題である——音楽の言語——標題音楽——感情の言語——音楽と感情の論理的構造——言語との類比は人を誤まらせる——音楽に内在する意味的要素についてのフーバーの見解——現示的シンボルは翻訳できない——アーバンの芸術理論に対する反駁——分析の困難——批評家の感情的態度——自律性を擁護する——「感情の代数学」としての音楽——誤謬——未完成のシンボルとしての音楽——意味の指定は音楽的思考の松葉杖——音楽的な意味は実在するが、しかし「内含的」である——形式と内容とが一体として経験される

## 第九章 芸術的意義の発生……

音楽の起源は芸術的ではない——民謡の起源——その発生に関する誤謬——素材は偶然的な音によって与えられた——造形芸術にモデルを取ることの利益——モデルの危険——標準の混同——分節的表現が芸術の目標である——芸術的ヴィジョン——音楽は比較的後れて発達する——それはモデルがないためである——リズムと語とがその唯一の先達である——節——モデルからの解放——芸術的意義——ベイターの言明——そこには諸芸術の比較論は含まれていない——諸種の芸術の内容——「美的情感」のなかに統一を求め——その情

感の本質——それは芸術の内容ではない——芸術家と聴衆——シンボルの適切性としての「芸術的真理」——それは逐義的真理とは区別される——芸術的洞察——芸術の標準は絶対的ではない——新しい形式は分りやすいものではない——古い形式は衰微して来る——逐義的解釈と芸術的ヴィジョン——神秘主義が意味の限界である

## 第十章 意味の織物

実践的ヴィジョン——事実の理解——事実の命題的形式——真と偽——事実に対する関心は神話を破壊する——諸「発見」は第二義的なものである——現実主義への傾向性は成長とともに発達する——事実の体系化は知性の挑戦である——現実性の標準としての事実——歴史はその典型的な表現である——それは科学よりもいっそう事実に即する——因果の関係——および検証——シンボルとサインとの結合——現実主義的思考の力——人間世界における変化——自然——シンボルが身に合わなくなる——近代生活——サインとシンボルは思考のたて糸とよこ糸である——サインの機能——シンボルの機能——意味の複雑性——「意味の充填された」シンボル——心的生活の複雑性——道徳生活のきびしさ——定位の欲求——強力な生命的シンボルの欠如——現代の現実は新しい「聖物」を与えるにはなおあまりにも新しい——行動の自由は固定した価値に依存する——価値はシンボルに依存する——祭式的行為——現代生活における

無意味さ——再定位は合理的な欲求——現代のパーバリズムは新しく現われた  
神話の生み出したものである

訳者あとがき……………三六九

文献表……………三七三

索引

